葛巻町の位置

村上明彦
（葛巻町教育委員会）

「北緯40度ミルクとワインとクリーンエネルギーの町」が私たちの町、葛巻町です。

人口約８千人、県都・盛岡市から車で90分、北上高地のまっただ中に位置し、標高千m級の山々に囲まれた高原風土の漂う酪農と林業の町です。

葛巻町は、地域の資源を宝に、自然の恵みを生かした「ミルクとワインとクリーンエネルギー」に取り組み、他に先駆けて、21世紀の地球規模での課題である「食料・環境・エネルギー」の問題解決に貢献しながら、町の発展的な状況の構築に努めています。

◆◆町の位置◆◆

【総面積】……434.99km²

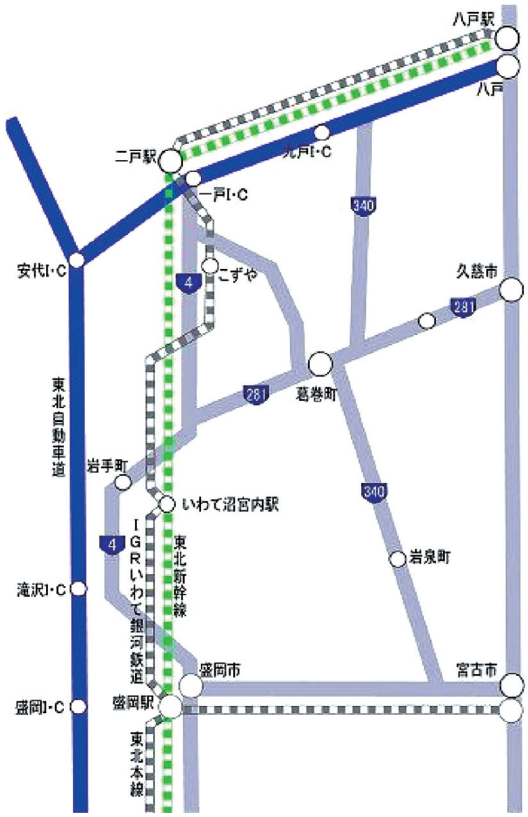
【標　高】……1,235m（最高）

……　234m（最低）

【役場所在地】

岩手県岩手郡葛巻町葛巻16地割1番地1

北緯40度02分11秒　東経141度26分28秒



◆◆気　象◆◆（平成19年）

【年間平均気温】……8.8℃

【年間降水量】……936.0mm

【年間日照時間】……1,194.0h

【最深積雪】……46.0cm

◆◆人　口◆◆

【人　口】……7,912人（H20.7.1）

【世帯数】……2,890世帯（H20.7.1）

【人口密度】……18.2人／km²

【１世帯あたりの人口】……2.7人

明神穴周辺の地質と地形

柳澤忠昭（日本洞穴学研究所）

北上山地の盛岡－早池峰山－釜石にかけて横切る根田茂帯の北側は地質学上、北部北上帯とされ、葛巻地域はその一角を占める。

北部北上帯の基盤は、古生代末から中生代ジュラ紀にかけて深海に堆積したチャート、頁岩、砂岩などの堆積岩類と、中生代白亜紀に激しい変動（大島造山運動）を伴いながら貫入した火成岩からなり、その基盤上に中生代後期～新生代初めの浅海・淡水性堆積物が堆積した。その後、北上山地は長期にわたる侵食を受けてなだらかになり、地下深くにあった岩石が露出するようになった。さらに、新生代第四紀に激しくなった山地全体の隆起と、同時期に起きた氷河期の海水面変動とによって、河川沿いには河岸段丘が形成された。

北部北上帯は、全体として北北西－南南東方向の走向をもつ地質構造をもち、西側の葛巻－釜石亜帯と東側の安家－田野畑亜帯とに区分されるが、産出する化石が少ないことや地質構造の複雑さから未解明の部分が多く、境界線の位置や構造発達史について現在も研究が進められている。近年、岩泉町大坂本の葛巻－釜石亜帯に属するとされる頁岩の露頭で、古生代ペルム紀層と中生代三畳紀層との境界部（Ｐ－Ｔ境界）が発見され、地質構造区分の解明とともに古生代末期に起きた生物大量絶滅の原因究明が期待されている。

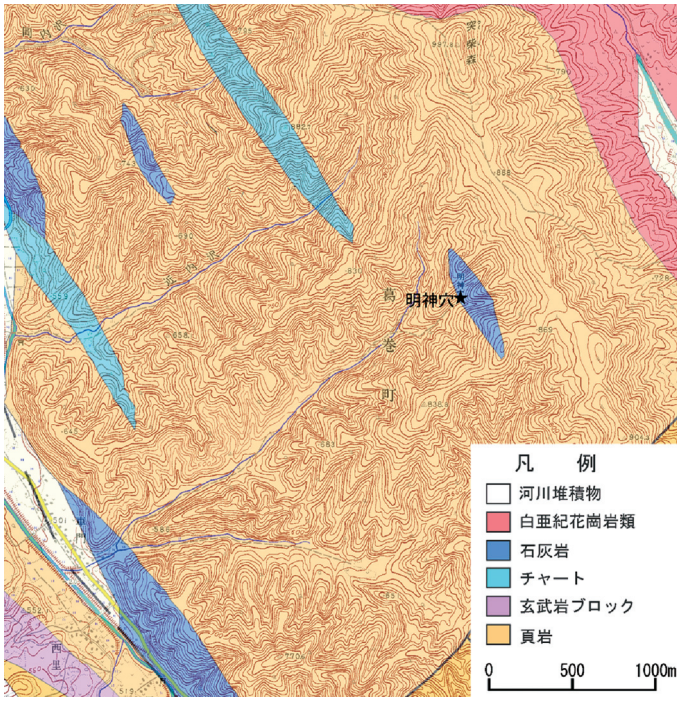
調査地域周辺においても、堆積岩類はほぼ北北西－南南東の軸をもつ褶曲構造をもち、この方向に馬淵川中流部沿いに走る葛巻断層などと、それに直交する南南西－北北東の走向をもつ小段層群が見られる。また、明神穴東方の突柴森東麓と樺森から明神岳にかけては、中生代白亜紀に貫入した花崗岩類が分布しており、その周囲の頁岩や石灰岩は熱変成を受けて、それぞれホルンフェルスや大理石に変化している。

袖山南麓を源流とする馬淵川は、地質構造に大きく影響を受け、上流部では南南東に向かうが、突柴森を最高点とする山並みを迂回するように、泥這、小屋瀬付近でそれぞれ右にほぼ直角に進路を変え、 葛巻

代	紀	絶対年代	北部北上帯での出来事
新生代	第四紀	170万年	隆起速度が速くなる（段丘の形成）
	新第三紀	2400万年	浸食を受け、平坦化
	古第三紀	6500万年	小川層群・清水川層の堆積 二升石デイサイトの貫入
中生代	白亜紀	1億4300万年	沢廻層の堆積 宮古層群の堆積 大島造山運動　花崗岩の貫入
	ジュラ紀	2億1200万年	北部北上帯の堆積 （安家－田野畑帯 釜石－葛巻帯
	三畳紀	2億4700万年	
古生代	二畳紀		
	石炭紀		
	デボン紀		
	シルル紀		
	オルドビス紀		
	カンブリア紀	5億7500万年	
先カンブリア時代			

地球の誕生46億年前

北部北上山地を中心とした地質時代表



明神穴周辺地質図（シームレス地質図をもとに作成）

断層沿いに四日市までほぼ直進する。

北部北上帯の東半分を占める安家－田野畑亜帯では、久慈市横川目から岩泉町有芸にかけて、南北60km、最大幅４kmの範囲に日本有数の安家石灰岩が分布し、およそ200本の洞穴が知られている。安家　石灰岩層は下位の玄武岩質枕状溶岩と上位のチャート層とに挟まれており、当時赤道付近にあった火山島のサンゴ礁からもたらされた石灰質砂が周囲の深海に堆積してできたと考えられている。

また、安家－田野畑亜帯、葛巻－釜石亜帯の両者には、古生代後期の化石を含むレンズ状石灰岩体が含まれており、外来性礫岩ブロックとされている。本地域に分布する小石灰岩体もその一つで、本地域では、馬淵川沿いの車門や五日市東方、突柴森の西側中腹などに分布する。明神穴は車門集落から東に入った「ホンナイ沢」の本流にあたる「下の沢」上流に位置し、長さ約700m、最大幅が約200mで北北西－南南東に細長くのびた小石灰岩体の西側の端に開口する。この小石灰岩体は、中生代白亜紀に東側に貫入した突柴森花崗岩体の熱変成を受けて大理石化しており、化石は産出しない。

頁岩の露頭（明神穴北側の林道切り通し）

石灰岩露頭（明神穴北側の林道）

本地域では、稜線平庭岳・突柴森から泥這西方に続き、その稜線の両側に数列の尾根が分かれる。この稜線の尾根は西側の方が緩やかで、東側よりも沢の規模も大きい。神穴は、突柴森の南方に伸びる稜線から西方に分かれる小さな尾根の端に位置し、沢の途中で２つのドリーネで水流が消失する北側の沢と、地表に水流の見られない南側の沢に挟まれている。明神穴から北西におよそ2.4km離れた岡内沢の斜面の小石灰岩体中にはザル穴が位置する。現在、葛巻町内で知られている洞穴はこれらの２洞穴だけである。

参考文献

佐藤利美：1997，葛巻の自然，葛巻町教育委員会，15-26.

大上和良：1989，日本の地質２東北地方，共立出版(株)，47-54.

大上和良：1992，岩泉地方史＜地質編＞，岩泉町教育委員会.

大上和良・永広昌之：1988，北部北上山地の先宮古統堆積岩類に関する研究の総括と現状，地球科学42.

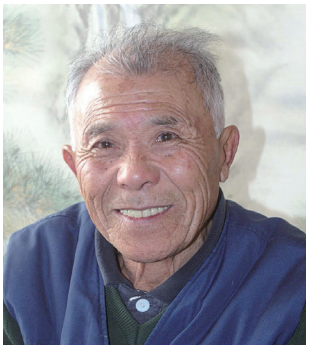
杉本幹博：1974，北上山地外縁地域の層序学的研究，東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告，701-22.

高橋聡：2006，北部北上山地，安家西方地域の層序と地質構造，東北大学理学部地圏環境科学科卒業論文.

地質調査総合センター：2007，20万分の１日本シームレス地質図，独立法人産業技術総合研究所地質調査総合センター.

明神穴名称の由来と伝説

村上明彦
（葛巻町教育委員会）



上脇　田三郎・談
（昭和３年生まれ・80歳）
平成20（2008）年
12月２日
自宅にて聞き取り

明神穴の名称

明神穴には正式な呼び名がなく、地域の人達は、「マミ穴」、「熊の穴」などと呼んでいました。

昭和30年頃になって、岩泉の炭鉱の勤めを辞めて地元に戻っていた人で村田仁太郎（現世帯主：保夫）さんという人がいました。

職場の組合活動も中心になってやった人で、いわゆる「物知り」と言われていました。その人が、「山の突端にある場所は“明神”という名がついている例が多い。明神穴と名付けたらどうか。」と言う事で命名された様に記憶しています。

古くから地元では明神穴のある沢を「穴の沢」と呼んでいました。

その沢は、昭和30年頃まで車門地区の牛（ホルスタイン）の放牧地でした。全部で50頭ほどもいたでしょうか。当時、搾乳する農家は数えるほどしかなく、子牛を育てて北海道庁に買い上げて貰う事が大半でした。

当時としては高値で取り引きされた為、農家の貴重な収入源でした。その為、牛が転落しては大変だと言う事で、明神穴から北方向に100m位の所に「落とし穴」と呼んでいた縦穴があったのですが、材木などで埋め立てたという経緯があります。

注：昭和11年11月３日発行「九戸郡誌」（岩手縣教育會九戸郡部會）には、すでに「明神穴」として次の様に紹介されている。
「明神穴、江刈村大字五日市字岡田澤に在る。東南に面する洞窟で石灰岩から成り、高さ六尺、間口三間位、内部は廣くて鐘乳石が垂下し、蝙蝠が生棲してゐる。奥行きは何程あるか全く不明である。」

昭和十一年の落書き

同書には「笊穴（ざるあな）」についても次の様に紹介されている。

「笊穴、江刈村大字五日市字岡田澤に在る。山腹に成れる高さ五尺、間口三間、奥行三間位の洞穴である。晝なほ暗く蝙蝠が棲息してゐる。穴の下方に清水が湧出する。」

祠と鳥居

終戦後、昭和25～26年頃だったと思いますが、佐々木子之助（現世帯主：恒雄）さんと佐々木留八（現世帯主：茂）さんの二人が、盛岡市（旧玉山村）の芋田にある駒形神社から御札を貰って来て、明神穴の入口に祠を建て(注1) て納めました。

駒形神社は、牛馬を祀る神様という事からだったと思います。そして、旧暦の 3 月15日を御神酒上げの日と決めたそうです。

私が自治会長をしていた10年ほど前には祠を建て直し、鳥居も建てました。その後、祠は熊に破壊される事が度々ありましたが、今でも 4 月 7 日には明神穴の御神酒上げを行っており、地域の神様として祀っております。

注1：洞口前の湧水出口が放牧していた牛の水飲み場だった事から、洞口前に祠を建立したらしい。

伝説

面白い話としては、本当かどうか分かりませんが、明神穴から入った犬が、久慈市大川目の三日町付近で見つかったと言う話もあります。

参考資料

岩手縣教育會九戸郡部會：昭和11年11月 3 日発行　「九戸郡誌」　P381